

学 位 論 文 要 旨

氏 名 山本 直樹

題 目 保育者養成におけるドラマ表現活動の教育的価値の実証的検討
—他者との関わりを大事にする「協働的な学び」の実践を中心に—

1. 研究の目的と方法

本研究は、他者との関わりを大事にする「協働的な学び」に対してドラマ表現活動がどのような教育的価値を有するかを実証的に検討するものである。具体的には、次の3点を目的とした。第1に、授業科目「保育内容(表現)」のうち、ドラマ表現活動を軸に全活動が構成されたシラバスの活動内容を分類し、その特徴を整理すること。第2に、ドラマ表現活動を体験した保育者志望学生の事後の内省記述を質的および計量的に分析し、保育者養成におけるドラマ表現活動の教育的価値を検討すること。第3に、表現への主体的参加が難しい学生を念頭に、その心理的ハードルの低減につながる指導上の工夫を検討すること。

方法としては、シラバスの内容分析と学生の内省記述の質的分析および計量的分析を選び、研究を遂行した。

2. 研究の概要

第1章では、上演の成否や作品の完成度よりも創造の過程そのものに価値を見いだすドラマ表現活動の研究動向を、保育者養成に限定して概観した。抽出した29件の論文を以下の3分類に整理した。

分類Ⅰ「ドラマ表現活動を領域「表現」の学びに再構成する研究」

分類Ⅱ「ドラマ表現活動で他科目の学びを目指す研究」

分類Ⅲ「ドラマ表現活動の実態把握を目指す研究」

そして、それらをふまえて、実践研究上の課題として、①活動内容の類型化(標準化の土台)の不足、②分析視点・検証手続きの不透明さ、③主体的参加を阻む心理的障壁の高さを確認した。さらに、保育者養成におけるドラマ表現活動が「協働的な学び」の導入段階の学びとして機能しうるかを、活動類型化・研究手続きの可視化・参加支援の具体化という3側面から検証する必要性を示した。

第2章では、保育者養成校の授業科目「保育内容(表現)」のうち、ドラマ表現活動を基軸に全活動が構成された2013年度の12件のシラバスを選定し、活動内容の抽出・分類によって全体傾向を把握した。12件(計180活動)の分析の結果、ウォームアップ(29件)、即興(42件)、指導法(39件)、学習総括(53件)、授業運営(17件)の5つのカテゴリーに整理できた。これにより、学生の等身大の即興体験から指導法へ接続し、成果を共有するという授業モデルが示唆され、保育者養成に適応したドラマ表現活動の開発に向けた糸口となる知見を得た。

第3章では、ドラマ表現活動を体験した保育者志望学生の内省記述を対象に、計量テキスト分析を実施した。分析には、樋口(2020)によるテキスト分析支援ソフトウェア KH Coder (Ver. 3)を補助的に用いた。語の出現頻度・共起関係・記述間の類似性を指標として、テキストに内在する意味構造を解釈した。具体的な実践は2つである。第1に、他者との関わりを前提とする「彫刻家と粘土」の実践である。学生の事後の振り返り記述を分析し、当該体験が保育者志望学生にどのような協働的な学びをもたらすかを考察した。第2に、ドラマ表現活動への主体的参加を支える工夫としてバンダナの活用に着目した実践である。その創作活動の中で発案・発表・鑑賞の各場面における教育効果を検討した。バンダナの活用は創造的思考と表現意欲の喚起、安心感の付与など、場面に応じて異なる支えとして機能することが確認された。

第4章では、本研究の総括として、①ドラマ表現活動で構成された授業の活動類型を提示し、実践者が参照可能な標準化の枠組みを提供したこと、②「彫刻家と粘土」に関する内省記述の構造を可視化したこと、③バンダナという身近な素材が心理的支えとなり主体的参加を促す足場として機能すること、の3点を明らかにした。

3. 研究の成果

本研究の成果として、「協働的な学び」に対するドラマ表現活動の教育的価値を、次の3点に整理した。

(1) 他者のイメージを汲み取る意欲が高まる学びを促す。

— 他者の意図やイメージを捉えようとする関心の喚起が期待できる。

(2) 差異を価値として受け止める学びを促す。

— 感じ方・考え方の違いを資源として受容し、対話・調整を通じて尊重を具体化する姿勢が期待できる。

(3) 協働による表現・創造の拡張を実感する学びを促す。

— 他者との協働を通じて、表現や創造の可能性が広がることの実感が形成される。

以上より、保育者養成におけるドラマ表現活動の充実と授業実践の進展に資する知見を提示し、学校教育実践学の質的充実に寄与することを示した。